

中国無政府主義試論

(5)

1. 劉師復

「資料1」についての補足的記述

孫文が中国の無政府主義の伝統を追認したからと言って、それで中国民衆の理想や希望に沿って、無政府的国家建設に精進した訳ではない。むしろ国会議員のリコール権（解任）や三権分立の他に考試権（官吏登庸のため）の試験（八昔の科挙にあたる）と監査権（司法・立法・行政を監査する）を追加して、五権憲法を考案したのは第三階級（ブルジョワジー）の代弁者であり、その政治的要求の体现者であったと評価されても仕方のないことで、彼が自賛して、欧州にない發明だと言えば、八あゝの思想は、夾七夾八の三民主義（種々雑多な三民主義（節中夏））と排撃する評家もあるのだ。

また、洪秀全の太平天国の乱の思想評価はまちまちで現代中国では「金田起義」として、その農民蜂起の情熱と、孔子廟破壊が評価されているが、洪秀全の思想に拠れば、彼のキリスト教信仰から来た儒教破壊であったから、これに沈黙して思想闘争の一面を強調するのでは十分とは言えない。孫文説では八洪秀全が実施した経済制度は共産的事実であって、言論ではないのである）とあ

るが、清朝の派遣する官軍と戦わなければならなかった太平天国軍側では「天朝田畝制度」を布告したものの、実施する迄には至らなかつたのが真相である。（制度では八田があれば等しく耕し、飯があれば等しく食べ、衣服があれば、等しく着る。至る所不均等はなく、何人も食と暖をとるのに飽かないということはない……田畑についてはこれを九等（階）に分け、男女を問わず、十六才以上は田を与え、十五才以下には半減の田を与える……田を耕せない者には養蚕、織布、縫衣、家畜飼育の仕事を委せ、毎年の收穫は自家用を除くと国庫に納める、冠婚葬祭の費用は国庫から出、廿五郷毎に教会を拵え、教会内では男女別の席を設ける……等がその主な内容である）とすれば孫文は政治的な発言をしたのであって、マルクス主義は真の共産主義ではなく、ブルードン、バクーニン主義が真の共産主義だとの言明は、当時の「国共合作」を念頭に置いたもので、ロシア革命成功の事実が、彼にとって一種の危機意識になつていたので読みとれるのである。太平天国の思想と運動は「中国化的基督教」（太平天国始末記・毛応章編撰）との説もあるが、筆者はその政治制度への固執ぶりからみて、カトリックの宗教的地位階制を踏まえた権威的共産主義とみる。さすれば、サン・シモンからコントへ至る社会思想と運動の脈絡の中

で捉えられるし、現中国の国家主義的共産制であれの評價される理由が納得できよう。孫文は康有為が批評した程の無教養な男ではなかった。中国の文人崇拜の伝統からすれば、康ほどは古文に通ぜず、その思想に通曉はしていなかったかも知れないが、何よりも西洋学から学んだ論理性―政治思想・制度―と事実から出発する現実家であつた。この後の点（現実主義）はこれまた中国人の優れた点であるとするれば、彼孫文はより強力な政府と国家を求めたとしても、（中国と中国人がヨーロッパや日本の殖民地に甘んじなければならぬ理由はないのだ）中国近代史上の偉人とするに足りよう。そして孫文と現代中国は洪秀全から「耕者有田」（耕す人に田畑を与えよ）を受けとり、ようやく実施できる時代に入ったのだ。また「各尽所能・各取所需」（各人は能力^{あた}限りを尽し、各人は需^{もと}に応じて受取る）の社会主義の一本の柱は曲りなりにも太平天国の理想から始まつたと中国では理解されている。

* * * * *

ところで香山の劉師復はどうしていたのだろう。李熙弼の八記同盟会中之一個暗殺団Vの記述によれば、師復は同盟会中の一部である「支那暗殺団」という秘密部会に属し、一九一〇年広州で蜂起があつた頃、例の汪精衛

が摂政暗殺の陰謀を企て、未遂に終つて、これを聞いたユエと香港在の同志が憤激し、機関を設置して、活動を開始したとある。炸薬の試験には、一ポンド、一・五ポンド、二・五ポンド、三ポンド弾など20弾ぐらい使用しその威力は二丈ほど離れた所から三寸余の厚板をぶち抜く程だつたと言う。一九一一年再び張鳴岐と李準暗殺の議が決せられ、李冠慈がこれにあたり、師復は妻の湘田と共に北京へ行つて（北京では漢人の一人住まいは危険であやしまれない為に、妻を同行したそうだ。）汪の企画を遂行することになった。冠慈は李準襲撃に成功するが、自身も左眼に受傷、弾片が脳中に入り致命傷となつた。海軍長官李準はあばら骨を二枚折り、死にはしなかつたが以後再起不能になつた。師復は李冠慈の偉業をたゞえ、一文（略伝）を草して、これが一九一二年六月同盟会誌に掲載された。とある。この年の一月師復は汪のとむらい合戦のつもりで、北上、しかし孫文が臨時總統に就任し、北伐の効果もあがり、また清帝、儀が退位したので、暗殺団は広州へ帰つた。そして民国が成立したので、初志は成つたとして解散を議決し、関係書類を焼却した。盟約の章は「同心同徳」で、支那暗殺団は民国前二年に創出され、民国元年に解散したと言う。これに拠つて、師復の活動は別のルへ向うのである。

参照（中国同盟会革命資料（一））

〔付記〕一読者から連絡があつて、劉師復が東京で同盟会に入つたと言ふのは疑わしい。名簿に氏名でていないのだから、馮自由の革命逸史だけに拠るのは危いのではないかと話があつた。馮自由は横浜生れの人で暁星中学に学び、一六才で孫文が自宅（貿易商の父と知合い）に來た折り、彼を知り、革命思想に共鳴して、その指導下に入つた。逸史は民国十七年に出版され、他に「開国前革命史」上中二編がある。師復への言及は開国前革命史にもみえるが、こちらの方は爆発事件に立会つた人の記事がそのまゝ載せてあつて、まともは逸史の方がよいので、資料1に採録した。師復の留学中の足どりはよく判らない。そして逸史の方の中国同盟会史略では、内部、外部、會計部、総理部等の部署と係り員氏名がでてゐる。しかし当時東京で三千人が参加したという人員については、各省分會長（支部長の意味か）は氏名が記されているが、師復の氏名はない。按ずると、彼は秘密会員であつたからかも知れない。更に中国同盟会史料（二）をみると、一九〇五年（乙巳年）に馮自由が香港に同盟分會を設置し、陳小白を會長とし、馮自由は書記長になつてゐる。この分解は孫文の生地が含まれ、同盟会の前身

であつた興中會を解散し、ここに吸収して、中国日報社を中心に、香港の各学校で体操と称する軍事訓練を施すなど、革命運動を実施していた。更に「丁未年党務報告」（一九〇七年）に拠れば、勢力が伸長し、参加会員がふえ、分会は各地に代理人や軍事絡連員を派遣して入党者を勧誘したと言う。この軍事絡連員姓名と住所は次ぎのようにある。

劉~~義~~航劉思復 澳門荷蘭園和隆街二十一号案 書室
劉~~義~~航劉思復 香山石岐西門外武峯里書報社

この記述を信用すれば、思復はこの時期、兄の劉~~義~~航と二ヶ所の住所に住んでいたことになる。いづれ軍事要員であつたから所属は秘密に属し、名簿にのらなかつたのだらうが、同盟会員であつた事に相違はないようだ。事実彼の事業績を記載した記述では「同盟会員の劉思復」と書き出されて居り、先の資料の丁未年（一九〇七年）の軍事活動では暴発事件が記されている。附録の中国同盟会成績一覽表では甲の部が蜂起成績、乙の部が暗殺成績とある、今それを訳出すると、

年次	中国曆	記 事
丁未	民國前五年 光緒卅三年 西曆一九〇七年	劉思復ユエの官吏誅殺を謀り未数。自炸して傷を受け逮捕される

己酉	民国前三年 宣統元年 西曆一九〇九年	熊成基が載洵の謀殺をはかる。 ハルピンに於て襲撃、不成功 にて死す。
庚戌	民国前二年 宣統二年 西曆一九一〇年	汪兆銘、黄復生等清朝摂政王 の謀殺を企て、未遂で逮捕さ れる。邱林が載洵を三藩市で 誅する。
辛亥	民国前一年 宣統三年 西曆一九一一年	三月温生才が満州將軍孚琦を 殺害。閏六月李冠慈、陳敬岳 が清提督李準を広州において 謀殺を企て、李冠慈が死ぬ。 李沛基は満州將軍鳳山を広州 で殺害。十一月楊雨昌、黄之 萌、張先培が袁世凱の謀殺を はかり不成功他

以上で先の読者への回答とする。

〔註記〕

*7 胡漢民の記述は「胡漢民自伝・伝記文学叢書四

十三」に拠る。

*8 漢民は広州の農家出身。一八七九年生れで日本
に留学。法政学校に学び、同盟会書記部長とし

*9 て南方支部長を兼ねた。辛亥の年に広東が解放
されると都督になった。汪兆銘とは中国流の兄

出来もしない大義を唱え、一つ一つの規定は輕
視した。甚だしいのは、自を雄とし、間違ひを
正しいとした（例をあげると香軍の人達は始め
から一党派を樹て、これを範とした。民国二年
（一九一三年）になるとあの人は公然と無政
府主義を言うようになった。光復後（清朝を倒
し解放されてから）は人民の出版は一切自由だ
とし、各誌紙は議論をもちだし、細事を挙げ、
党の領袖を諷刺して、これを「新官児」V（新官
僚）とそしつた。胡仲愷が城内に来て、行政を
話し深夜、外へ出ると、ある新聞は「新官僚が
藤椅子に坐り、口では経済術語を喋舌っている」
と書いた。これなど、荒唐無稽も甚しいものだ）
朱執信が嘗て私（漢民のこと）に「訳註」に言っ
た。△宋の儒者が言っている。天君が泰然とし
ていれば、百体（庶民）はおのづから令に従う
ものだ。人の噂や評語には耳を借さぬことVけ
だし党人の態度は憤慨すべきものがあつた。革
命の際は少数の人の努力によるだけで、党の一
致した行動はとれないかも知れない。しかしこ
れは平常の組織と訓練に欠陥があるのであつて
必ずしも党員の過失ではないかも知れない。」

弟であり、汪のテロリズムの心情を活写してい
る。また都督になった際の記述は「私がこの任
務を受けた時、城内からは官吏が消え、無政府
状態だつた。直ちに陳景華を民政部長に任じ先
づ警察の任にあてた。それから軍政府の雛形を
諮議局に作つた。…（それから通貨の改制と借
款の作業にあつた）…：当時民軍の分子は赤
貧の農民、失業者、土匪が基本隊で、次ぎに郷
団の人びとや敗兵を加えたが軍則はよく守られ
訓練によつて充実した」彼は長官に就任してか
ら忙がしくなり、朱執信などは電話にでるだけ
で耳が腫れあがつたと言う。「私達の弱点は」
と彼が記述する。「当時の帝国主義による各紙
の報導するところとは違つていた。けれど革命
において専制を実施しなければならなかつた
し、名目では自由民権を取らなければならなかつ
た。そこで矛盾がでてきたのだ。私達は革命
書生で（漢民は32才師復は27才ぐらい）訳註）
経験も少く、反動分子は隙をうかがつて居り、
精神は消耗して、根本に動揺があつた。…：党
人はもともと浪漫的で、平等自由についての言
説は多く。紀律服従は少しも重視しなかつた。

胡漢民の記述は、はからずも師復達をやつて
いた香軍と心社の人びとの都督に対する態度と
行為を伝えている。

（この項つづく）

★リベルテール・サロン★

